

豊後大野市所在岡^{おか}なまこ墓の調査

— 17世紀初頭のキリシタン墓地の一例 —

田中裕介

1 はじめに

「岡なまこ墓」と呼ばれる墓地が大分県豊後大野市大野町大字岡に所在する。墓地に多数置かれた長円形の石材が「なまこ」のかたち似ていることからこの名が付き、地元ではキリシタンの墓とつたえられてきた。その特異なかたちと伝承を重視して旧大野郡大野町の史跡指定を受けていた。しかし指定の根拠は地元岡集落につたわるその伝承とその「なまこ」とよばれた形態の特異さによるもので、史料によって根拠づけられたものではなく、それまで知られていたキリシタン墓地の形態とも大きく異なっていた。そのためあまり注目されなかった。いっぽうこの墓地内に所在する2基の宝篋印塔は1390年代の作例として注目され、2005年に原田昭一氏によって紹介されていた^(註1)。14世紀に活躍しその作品が豊後国大野郡一帯に分布する石工玄正(玄聖)作のデザインを継承する作例として評価されたものである。

このような状況の中、この墓地がキリシタン墓地として改めて注目されたのは、2011年に行われた臼杵市野津下藤キリシタン墓地の調査からである。下藤墓地では埋葬施設と墓碑とは別に、墓上施設としての石組遺構が近世初期のキリシタン墓に備わっていることが判明したのである^(註2)。同年の4月、下藤遺跡の現地説明会の際に、豊後大野市教委の諸岡郁氏が下藤墓地の石組遺構によく似た遺構が、岡なまこ墓のなかに存在すると指摘したことにはじまる。同年5月25日現地調査を諸岡氏と田中で行い、石組遺構に伏碑をかぶせた墓(15号)を確認し、周囲に20基以上の伏碑状の石材が存在することを確認した。その後、神田高士氏、今野春樹氏、大石一久氏も現地を確認した。石組遺構と多数の「伏碑」の存在は、キリシタン墓碑そのものや十字架碑などは未発見であるものの、下藤墓地と同一性格のキリシタン時代の墓地であることは容易に理解された。そこで旧大野町時代に作成された後藤幹彦・佐藤祐介氏作成の墓地全体の平面図と豊後大野市合併時の史跡再登録の際の写真の提供をうけて、墓碑および石造物の実測調査をおこなった^(註3)。その結果、15号墓につづいて42号墓においても伏碑の周囲下部に石組遺構の一部が露出していることが判明して、キリシタン墓地である確信がさらに深まった。本稿はその調査成果を報告し、今後の研究に備えるものである

なお今報告の概要を科学研究費報告書の中に掲載しており^(註4)、本稿はその詳細版である。

註1 原田昭一2005「中世における石造物流通の一様相」『日引』7 石造物研究会

註2 すでに長崎県平戸市ウシワキ遺跡で、埋蔵施設の墓上に石積の遺構が存在することが知られていたが、平戸島では現在まで同様の石積遺構が墓上に行われているため、この墓地をキリシタン墓地と特定するのを躊躇された。2008年調査 北島・塩塚篇『市内遺跡確認調査報告書』Ⅷ 平戸市教委

- 下藤遺跡の石組み遺構についてはその後、神田高士氏によって速報と分類が報告された。神田高士2012「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」『大分県地方史』214大分県地方史研究会
- 註3 調査は2013年2月11日、7月7・14・22日、8月3日、2014年7月24日・8月5日に断続的に行った。石造物の実測は田中のほか、一瀬勇二、千原和己、宮木貴史（別府大学院生）、竹田奈緒子、久保千明、松浦由佳、松園菜穂、鮎川和樹、村田仁志、中原彰久、鮫島葵（別府大学生）が参加しておこない、測量には山下祐雨（別府大学院生）、井大樹、藤川貴久（別府大学生）、トレースは佐藤理恵、北原美希、白濱聖子（別府大学院生）が行った。また表作成にあたっては白濱に特段の協力を得た。調査にあたっては岡地区区長、墓地所有者、高野弘之・諸岡郁（豊後大野市教委）、後藤幹彦、野村俊之、福永素久（大分市教委）等各機関各個人に協力をえた。
- 註4 田中裕介2014「岡なまこ墓の調査」『キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究』2012～13年度科研費報告書、p 9～13

2 墓地の立地 (図1)

大分県最大の河川大野川の支流 ^{あかね} 茜川の南の台地上に岡集落は所在する。墓地は、北側に岡集落を見下ろす尾根上の丘陵頂部に所在し、南側背後に岡集落の産土である岡神社がある。地名事典(註5)によれば、墓地の所在する江戸時代の岡村は1593（文禄2）年以来幕末まで中川家岡藩に属し、



図1 岡なまこ墓の位置

明治の廃藩置県以後大野郡^{うしろだ}後田村に属した。近世以前は豊後国大野郡井田郷^{いだ}に属し、南北朝期以前は国衙領であった。17世紀

中ごろに作られた正保郷帳によれば、田42石余り、畑36石あまり。村内字揚弓に所在する岡神社は1728(享保13)年創建で1878(明治11)年岡村神社となる。神社は墓地の南奥にあり、参道が墓地の東に接して集落に下っている。集落を縦断する道に参道が取りつき、その参道の交差点にある旧家が墓地の所有者の芦刈氏の住宅である。

註5 『大分県の地名』日本歴史地名体系45 1995 平凡社

3 墓地の現状(図2)

墓地は尾根線に沿って南北20m東西8mほどの長方形の区画をやや掘くほめて造成している。現状では北西の一角がやや飛び出し、周囲は土手の上にやや高くなっているが、その土手は人工的な造成か、墓前祭祀の経過による堆積なのか判然としない。現状では東側に神社参道に連絡する土手のとぎれが存在し入口的に利用されているが、入口をふさぐように墓石がならぶため本来の墓域への入口ではないと推定される。18世紀に神社

表1 岡ナマコ墓石造物一覧

No	形式	現状	損壊状況	備考
1	伏碑	半ば埋没	—	
2	伏碑	埋没	—	未実測
3	伏碑	半ば埋没	—	
4	伏碑	—	—	
5	伏碑?	—	6片に割れる	台石?
6	伏碑	—	—	
7	伏碑	—	—	
8	伏碑	—	2片に割れる	
9	伏碑?	—	剥離激しい	台石?
10	伏碑	—	2片に割れる	
11	伏碑	埋没	—	未実測
12	伏碑	—	—	
13	伏碑	—	—	
14	伏碑	—	—	
15	石組+伏碑	—	—	石組には地輪と火輪が使用されている
16上	五輪塔(火輪)	—	—	16下の上に置かれていた
16下	五輪塔(地輪)	—	—	—
17	近世墓石	—	—	1803年銘 台石二段総高100cm
18	伏碑	—	3片に割れる	
19	伏碑	半ば埋没	—	
20上	五輪塔(地輪)	—	—	20下の上に置かれていた
20下	五輪塔(地輪?)	—	—	台石?
21	伏碑	—	—	
22	伏碑	半ば埋没	—	
23	伏碑	東端埋没	—	
24	伏碑	—	—	
25	五輪塔(水輪)	—	上下欠失	
26	(欠番)			
27	五輪塔(火輪)	—	周囲欠失	
28	五輪塔(火輪)	—	一部欠失	
29	伏碑	半ば埋没	—	
30	伏碑	埋没	—	未実測
31上	五輪塔(火輪)	—	—	3つの部材が碁笥合わせて置かれる
31中	五輪塔(地輪)	—	—	
31下	宝塔基壇	—	一部欠失	
32	伏碑	—	—	
33	伏碑	埋没	—	未実測
34	(欠番)			埋没して確認できず
35	伏碑	埋没	—	未実測
36	五輪塔(火輪)	—	一部欠失	
37	宝塔笠	—	一部欠失	
38	(欠番)			
39	伏碑	埋没	—	未実測
40	(欠番)			
41	(欠番)			
42上	五輪塔(空風輪)	—	—	
42	宝篋印塔(笠・塔身?)	—	隅飾り欠失	故意の破壊か? 原田2005の岡神社1号宝篋印塔 1400年頃製作
43	石組+伏碑	半ば埋没	—	
44	近代石塔	—	—	台石1段
45上	近代石塔	—	—	台石2段
45	宝篋印塔(基礎・基壇)	—	—	原田2005の岡神社2号宝篋印塔 1390年代製作
46	伏碑	埋没	—	未実測

※番号は、旧大野町指定時のもの。現状では埋没して実測できないものがある。欠番は今回の調査で、石造物とはみとめられなかった石片。

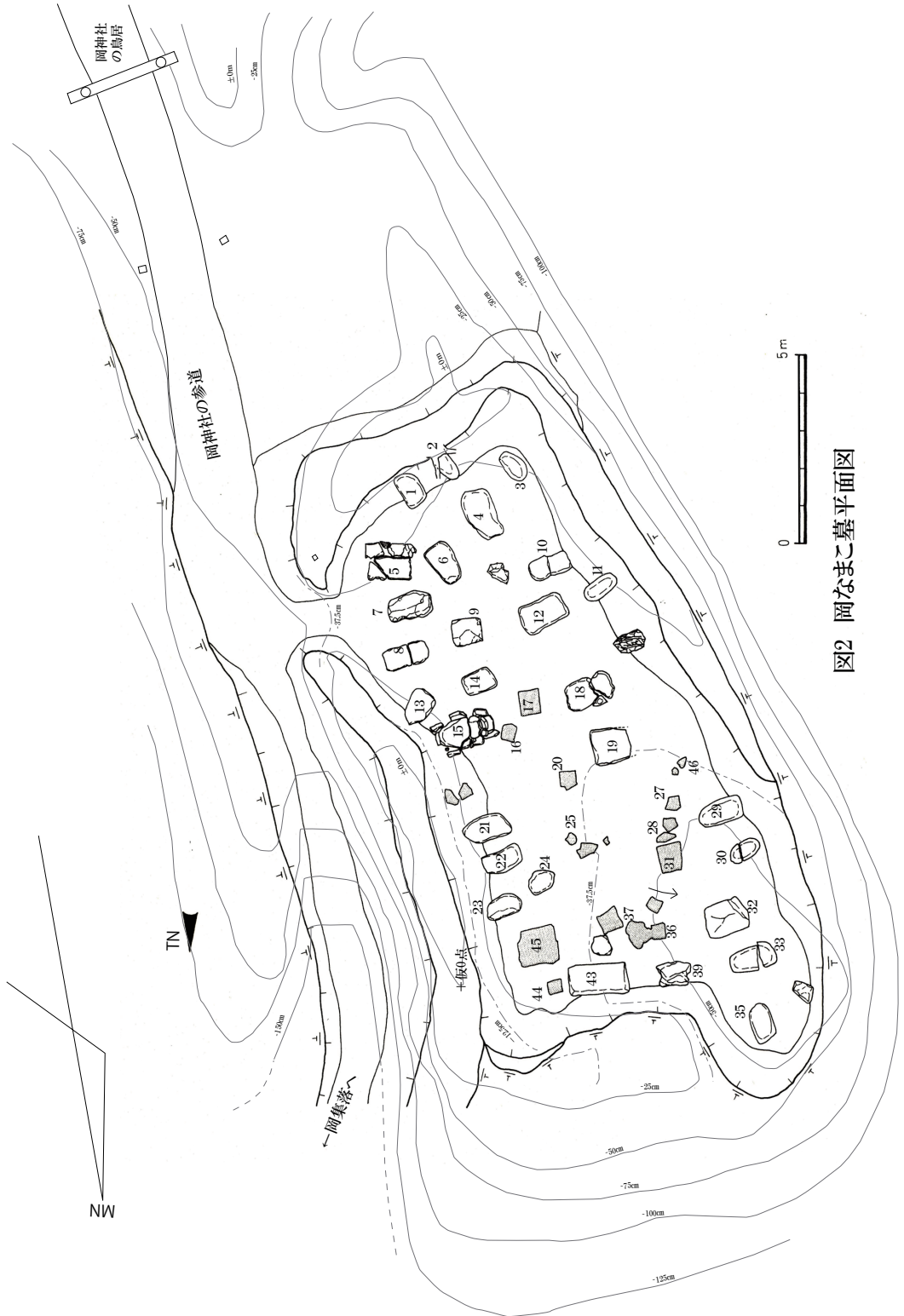


図2 岡なまこ墓平面図

の参道が整備された際に入口になったものと推測される。墓地全体は尾根の緩やかな斜面に位置し南が高く北が低い地形である(図2、写真図版1~4)。

現在墓地には墓上施設である石組遺構に伏碑形墓石をかぶせた墓が2基(15号、43号)、伏碑のみ露出して石組遺構が見えない遺構が28基現存する。うち溶結凝灰岩製の墓碑は2基のみであって、残り27基は混礫凝灰岩である。この後者の凝灰岩は風化しやすくもろいため石材としてほかの用途に利用されることはほとんどなく、石工に注文した石材と云うよりは、自前で周辺の適地から切り出した可能性がたかい。

中世石造物は宝篋印塔2基、五輪塔の部材は14点、宝塔の部材2点を見出すことができ、ほかに近世の墓石1基、近代石塔2基が残されている。

調査は旧大野町指定時につけられた番号をそのままちい、形態が判明する伏碑のみ10分の1縮尺で実測をおこない、頂部だけ露出してその存在は確認できるが形態や寸法が観察できない伏碑は実測しなかった(表1)。そのように選択したうえで寸法の計測、クリノメーターを用いた長軸の方位計測、石材の種類判別や、個別の残存・損壊状況を記録し写真撮影をおこなった。その観察結果が以下の各表である。

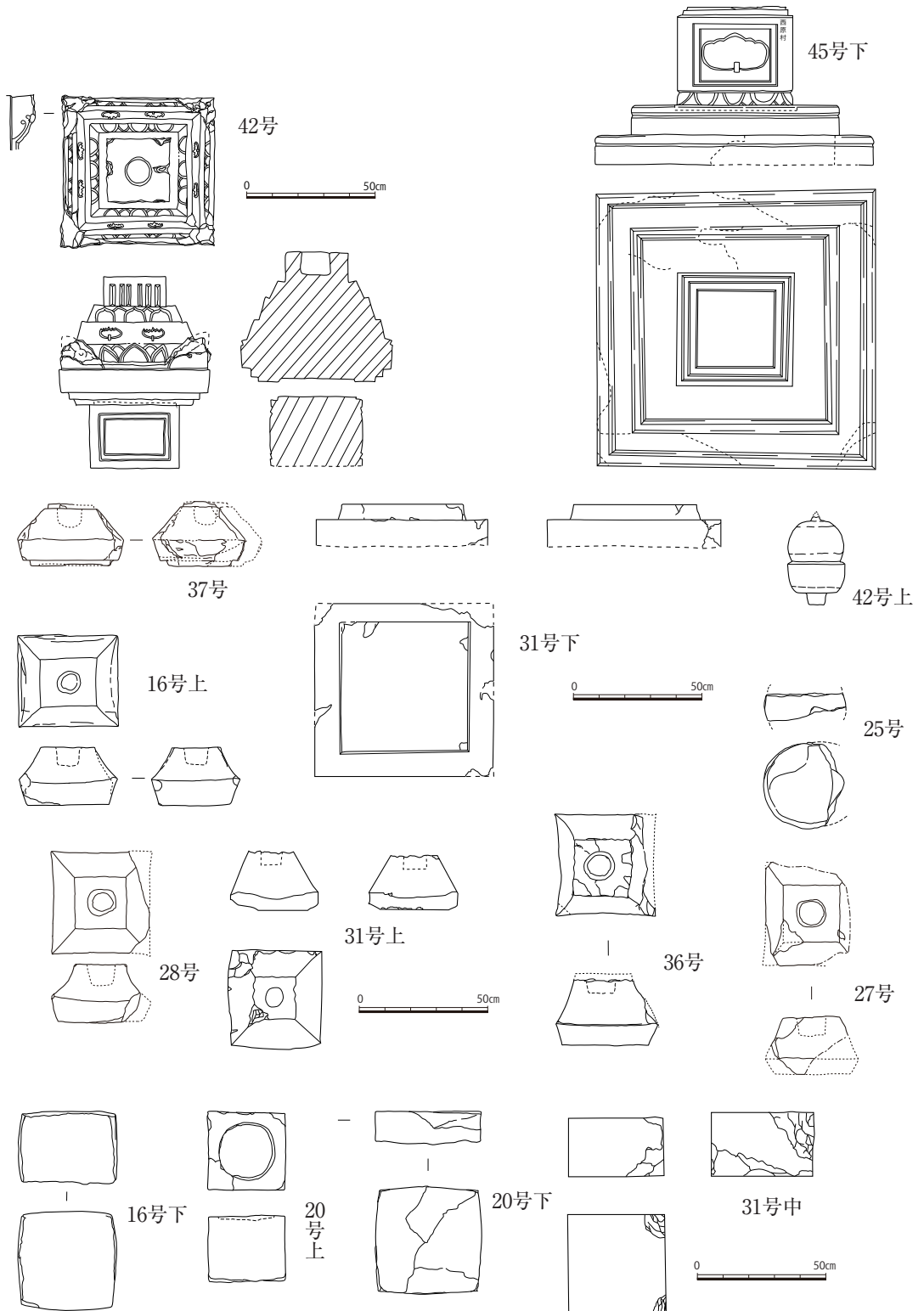
4 中世石塔(表2、図3、写真図版1・2)

岡なまこ墓には、14世紀末に製作がさかのぼる宝篋印塔2基とキリシタン墓地に先立つ16世紀代の石塔群(五輪塔・宝塔)などの石塔の部材が散乱あるいは基筒合わせで積み重なった状態で存在

表2 岡ナマコ墓中世石塔一覧

No	形式	属性	型式	石材	寸法(cm)			銘文等	方位 (北から)	損壊状況	備考
					長さ	幅	高さ				
15	五輪塔	地輪・火輪	—	溶結凝灰岩				なし	—	—	石組遺構に転用
16上	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	39	35	22	なし	—	—	16下の上に置かれていた
16下	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	38	38	27	なし	—	—	—
20上	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	30	30	25	なし	—	—	20下の上に置かれていた
20下	五輪塔	地輪?	—	溶結凝灰岩	41	41	13以上	なし	—	—	台石?
25	五輪塔	水輪	—	溶結凝灰岩	31	31	10以上	なし	—	上下欠失	
27	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	40	33以上	22	なし	—	周囲欠失	
28	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	40	38	22	なし	—	一部欠失	
31上	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	37	36	23	なし	—	—	3つの部材が基筒合わせで置かれる。二段一石
31中	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	38	37	25	なし	—	—	
31下	宝塔	基壇	—	溶結凝灰岩	69	69	15	なし	東へ90度	一部欠失	
36	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	38	38	25以上	なし	—	一部欠失	
37	宝塔	笠	—	溶結凝灰岩	41	36以上	24	なし	—	一部欠失	
42上	五輪塔	空風輪	—	溶結凝灰岩	22	22	36	なし	—	—	
42	宝篋印塔	笠	玄正系	溶結凝灰岩	59	59	50	なし	—	隅飾り欠失	故意の破壊か? 原田2005の岡神社1号宝篋印塔 1400年頃製作
		塔身?		溶結凝灰岩	36	36	26	なし	—	—	
45	宝篋印塔	基礎	玄正系	溶結凝灰岩	45	44	39	西原村	西へ82度	—	原田2005の岡神社2号宝篋印塔 1390年代製作
		基壇		溶結凝灰岩	108	105	23	なし	—	—	

図3 中世石塔実測図 (25分の1)



している。本来の位置は不明である。いずれも大野郡内で産出する阿蘇溶結凝灰岩製である。以下宝篋印塔、宝塔、五輪塔の順に記載する。

宝篋印塔 42号は宝篋印塔の笠と塔身である(図3、写真図版1)。45号下は基礎と基壇である(図3、写真図版1)。42号と45号は塔身と基礎の寸法が合わないので同一個体ではない。いずれも溶結凝灰岩製である。42号の塔身については背が低く月輪の表現がないことから宝篋印塔の部材ではない可能性もあるが、笠と寸法があっておりひとまず同一の図で報告する。

42号の笠の段形は上部3段下部2段で、上部1段に退化して大型化した開花蓮を表現し、上部2段目には2区画の小型の格狭間を表現する。上部3段目には単弁3弁に間弁を配している。露盤には退化形態の縦連子の表現があり、隅飾り突起には結節点に蕨手状文を配する。塔身は二重の方形区画をもつ。

45号下は基礎と基壇であり、基礎の上部段形は2段、方形輪郭は2重でその中に格狭間を配す。下部には単弁と間弁による反花座を設ける。

原田昭一の研究^(註6)によれば、「玄正(玄聖)系宝篋印塔」の最末期の作例で1390年代でも1400年に近い製品にあたる。詳細は原田の論文に譲るが、付け加えることがあるとすれば、42号の笠の隅飾り突起が4カ所とも根元から折れるように破損していることである。ほかの部位には目立つ破損はない。隅飾り突起の欠失は第1節でもふれた西寒田クルスバ遺跡3号宝篋印塔でも認められる^(註7)。単なる偶然とは思わず、何らかの作法に従った破壊痕の可能性を指摘しておきたい。また45号の基礎側面上部に「西原村」の銘文を確認した。造立と当初の銘かどうか確認できないが、風化の度合いからみて最近のものではない。西原村は岡村の南方向の大野川本流南岸に位置する近世村で、臼杵藩領にあたる。

宝塔 宝塔の笠(37号)と宝塔基壇の可能性のある1点(31号下)の計2点である(図3、写真図版2)。

37号は露盤と垂木型を薄く削り出し、ほぞ穴は丸い。軒口はやや傾斜し、反りはない。損壊しているが1辺41センチの正方形の小型の笠に復元できる。31号下は、1辺69cmの1石を2段に削り出した宝塔の基壇である。

五輪塔 いずれも五輪塔の部材である(図3、写真図版2)。内訳は空風輪1点、火輪は15号墓の石組遺構に転用されているものを含めて6点、水輪1点、地輪は15号墓に転用されているものを含めて5点である。

42号上は完形の空風輪、16号上・27号・28号・31号上はいずれも一部が損壊した火輪である。軒口の厚いものと薄いものがあるが、いずれも反りは弱く、一辺40cm弱の大きさである。25号は損壊の激しい水輪である。16号下・20号上・20号下・31号中は地輪である。16号下と20号下はやや胴張である。一辺30cmで特に小型の20号上を除けば、火輪の大きさに対応する。何れも小型で、火輪は扁平化しており16世紀代の製品と推定される。

註6 原田昭一2005「中世における石造物流通の一様相」『日引』7 石造物研究会

註7 田中裕介2014「西寒田クルスバ遺跡の石造物」(註4.科研費報告書P6)

5 伏碑と墓上施設（表3、図4～7、写真図版2～4）

以下にこの墓地を特徴づける伏碑群を記載する。現状では29基の伏碑を確認した。いずれも扁平で文字は刻まれていない。高さの低い低平な石材を横置きにしたものである。立碑との対比において伏碑とされる墓碑形態である。この墓碑の下には、まず墓上施設としての石組遺構が確認されている。そこでこの墓地がキリシタン墓地であることを証明する15号墓と43号墓を先に報告する。

①石組遺構と伏碑

15号墓 この遺構は墓地中央から東寄りに位置し、尾根に直交しておおよそ東西方向に設けられている。墓上施設である長方形に組まれた石組遺構の上に小判型の長円形伏碑をかぶせたもので

表3 岡ナマコ墓伏碑一覧

No	形式	属性	型式	石材	寸法 (cm)				銘文等	方向 尾根に対して	方位 (北から)	現状	損壊 状況	備考
					規格	長さ	幅	高さ						
1	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	小型	92以上	66	13以上	なし	平行	西へ15度	半ば埋没	—	
2	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	平行	西へ20度	埋没	—	未実測
3	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	小型	91	59以上	10以上	なし	平行	西へ20度	半ば埋没	—	
4	伏碑	B-2	Ⅱ式	混磔凝灰岩	大型	135	78	15以上	なし	平行	西へ30度	—	—	
5	伏碑?	B-2	Ⅰ式	溶結凝灰岩	大型	125以上	100	11以上	なし	直交	東へ110度	—	6片に割れる	台石?
6	伏碑	A-2	Ⅱ垂式	混磔凝灰岩	大型	116	68	15以上	なし	平行	西へ18度	—	—	
7	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	大型	131	69	20以上	なし	直交	東へ75度	—	—	
8	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	大型	133	64	25	なし	直交	東へ80度	—	2片に割れる	
9	伏碑?	B-2	Ⅰ式	溶結凝灰岩	小型	80	68	15以上	なし	直交	東へ81度	—	剥離 激しい	台石?
10	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	小型	81	61	9以上	なし	直交	東へ72度	—	2片に割れる	
11	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	直交	東へ66度	埋没	—	未実測
12	伏碑	B-2	Ⅱ式	混磔凝灰岩	大型	130	79	15以上	なし	直交	東へ80度	—	—	
13	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	小型	102	61	20以上	なし	斜交	東へ44度	—	—	
14	伏碑	B-2	Ⅱ式	混磔凝灰岩	小型	90	52	15以上	なし	直交	東へ80度	—	—	
15	石組 + 伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	大型	150	100	30	なし	直交	東へ87度	—	—	石組には地輪と火輪が使用されている
18	伏碑	A-2	Ⅱ垂式	混磔凝灰岩	大型	134	80	20以上	なし	直交	東へ79度	—	3片に割れる	
19	伏碑	B-2	Ⅱ式	混磔凝灰岩	大型	85以上	90	18以上	なし	直交	東へ90度	半ば埋没	—	
21	伏碑	A-2	Ⅱ垂式	混磔凝灰岩	大型	120	77	15以上	なし	直交	東へ90度	—	—	
22	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	大型	120	67	13以上	なし	直交	東へ82度	半ば埋没	—	
23	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	小型	96以上	53	20以上	なし	直交	東へ80度	東端埋没	—	
24	伏碑	A-2	Ⅱ垂式	混磔凝灰岩	小型	80	58	10以上	なし	直交	東へ86度	—	—	
29	伏碑	AB-1	Ⅲ垂式	混磔凝灰岩	大型	130	76	12以上	なし	直交	東へ87度	半ば埋没	—	
30	伏碑	A-1	Ⅲ式	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	直交	東へ80度	埋没	—	未実測
32	伏碑	B-1	Ⅲ垂式	混磔凝灰岩	大型	123	94	15以上	なし	直交	東へ84度	—	—	
33	伏碑	—	—	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	直交	東へ84度	埋没	—	未実測
34	(欠番)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	埋没して確認できず
35	伏碑	—	—	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	平行	西へ4度	埋没	—	未実測
39	伏碑	—	—	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	直交	—	埋没	—	未実測
43	石組 + 伏碑	B-2	Ⅱ式	混磔凝灰岩	大型	162	85	17以上	なし	直交	西へ83度	半ば埋没	—	石組部分未実測
46	伏碑	—	—	混磔凝灰岩	—	—	—	—	—	直交	—	埋没	—	未実測

図 4 岡なまこ墓伏碑実測図① (25分の1) ①~⑦

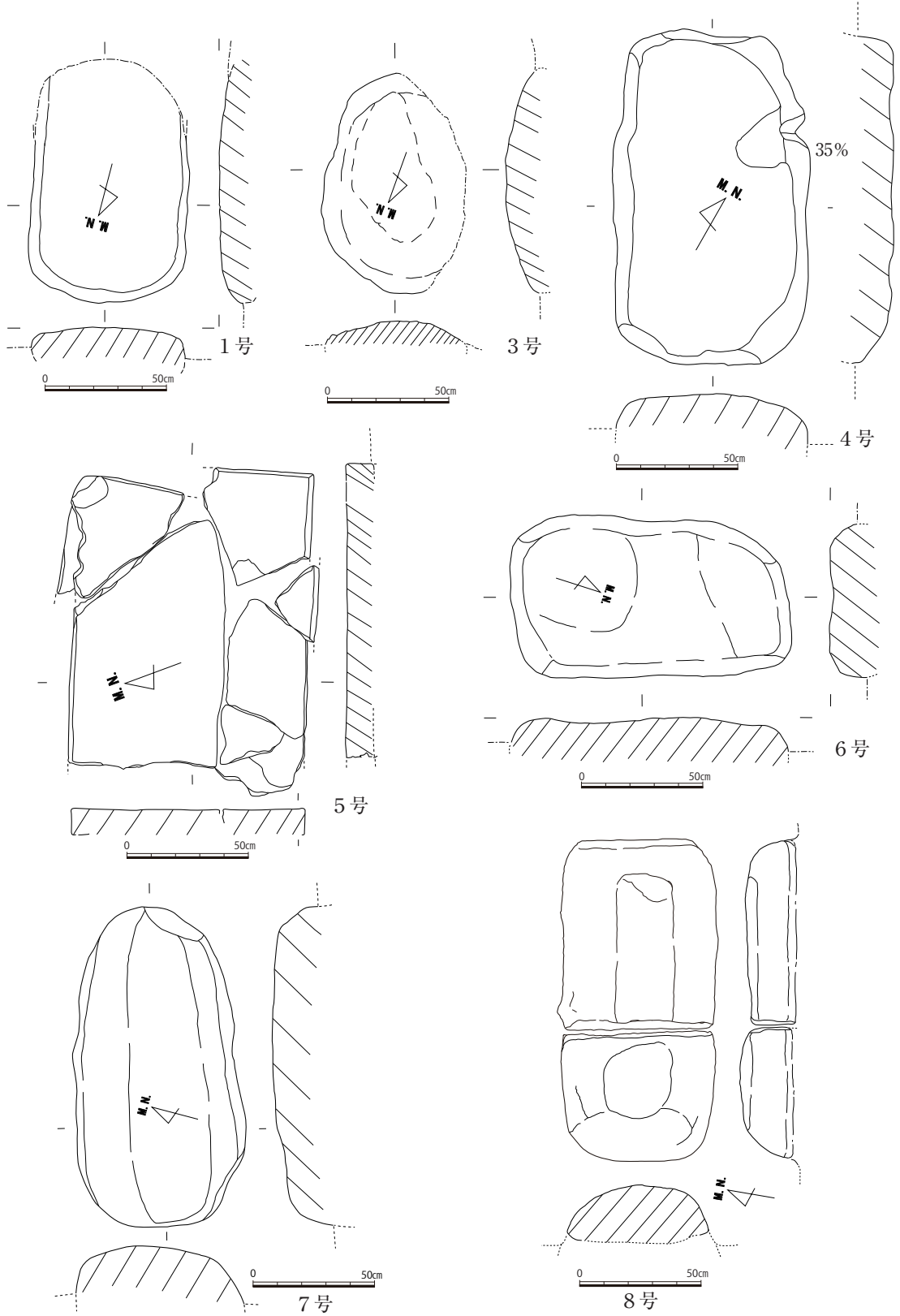


図5 岡なまこ墓伏碑実測図② (25分の1)

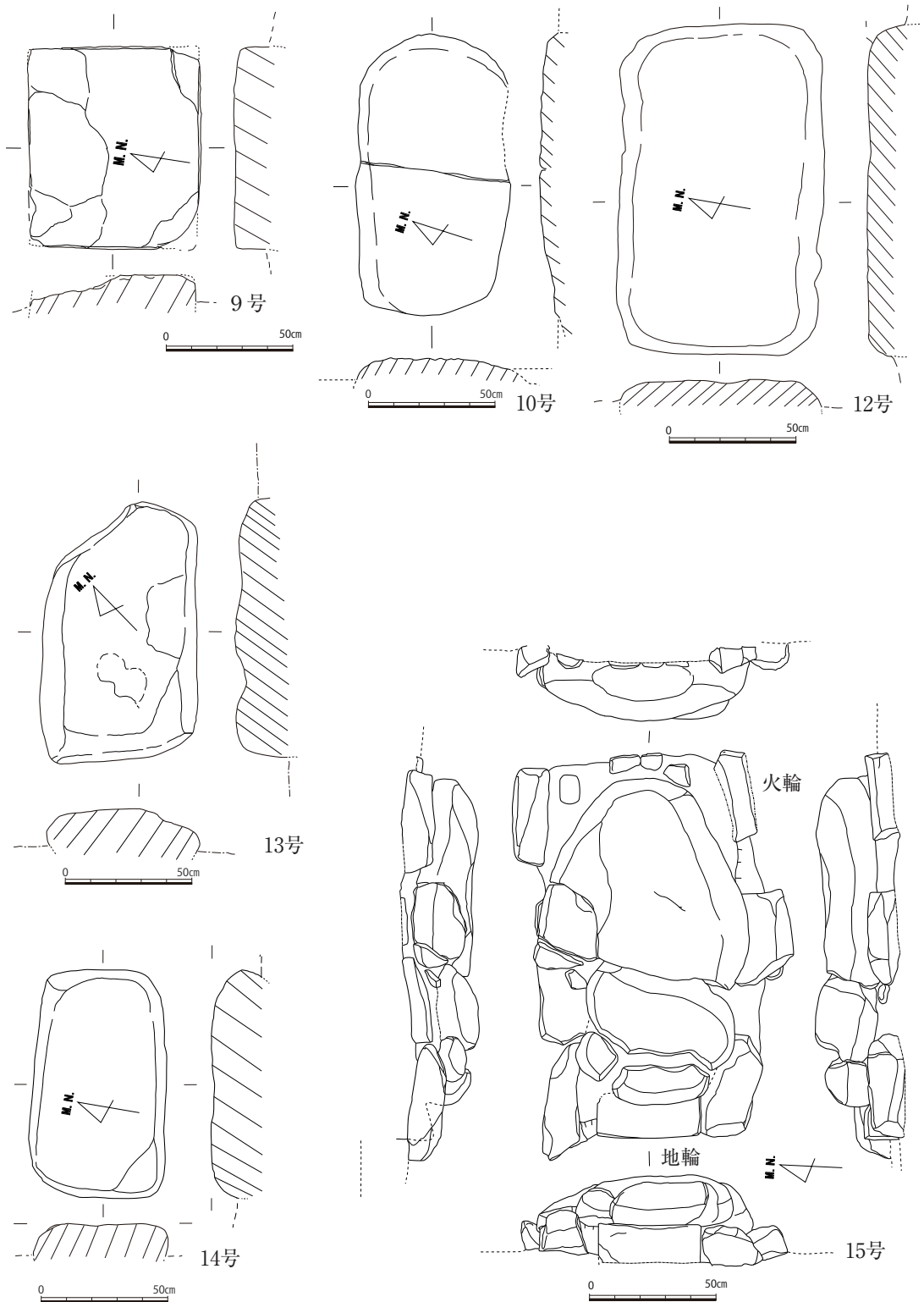
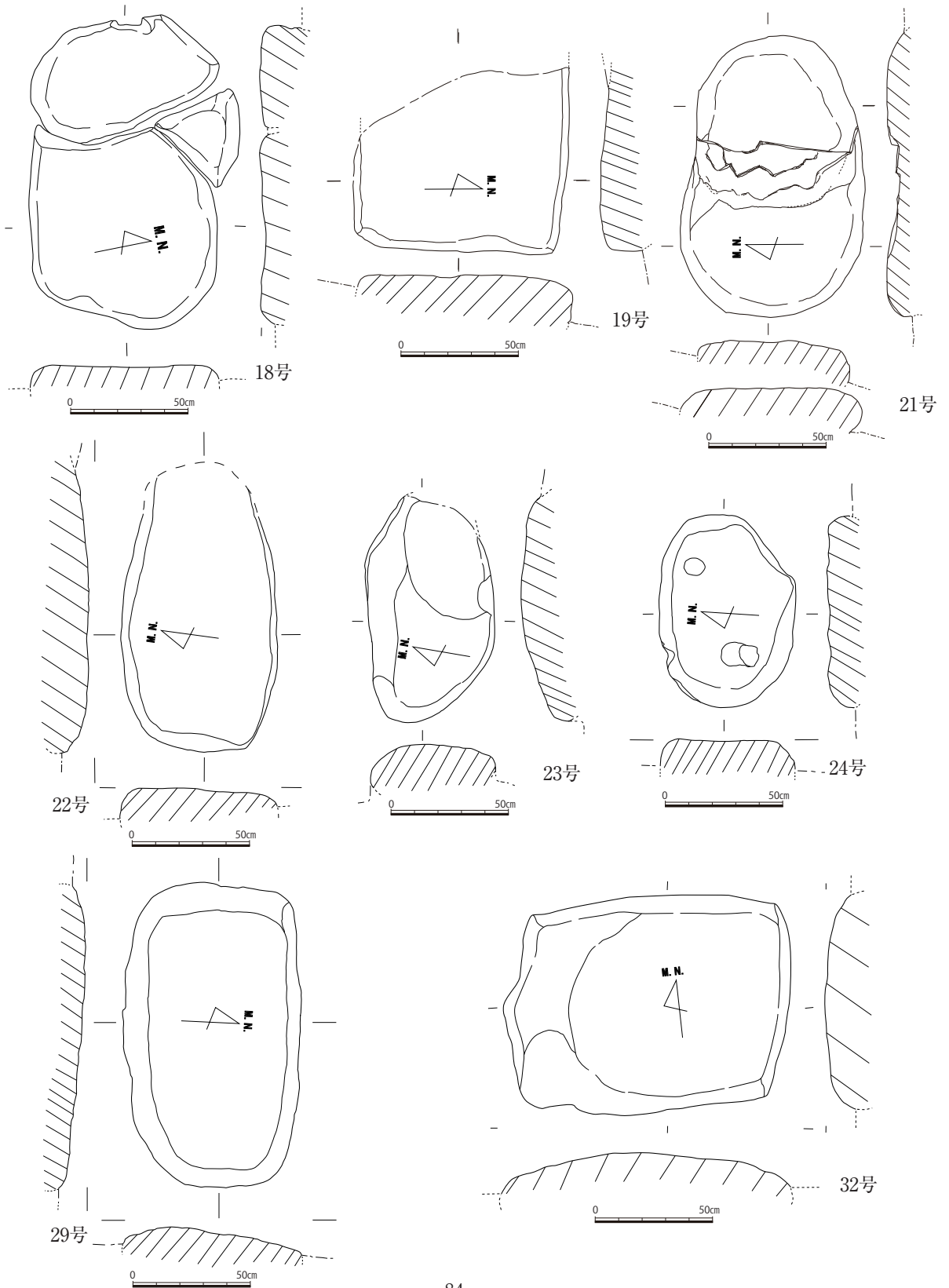


図6 岡なまこ墓伏碑実測図③(25分の1)

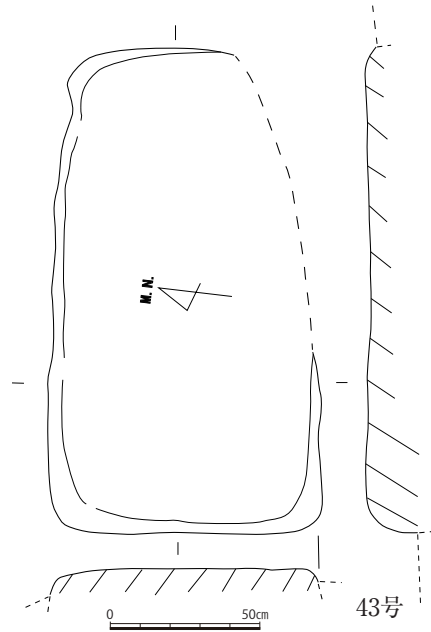


ある(図5、写真図版2)。石組遺構は外周で長さ約150cm、幅100cmの方形に配置されている。岡なまこ墓のなかでも最大規格の遺構である。

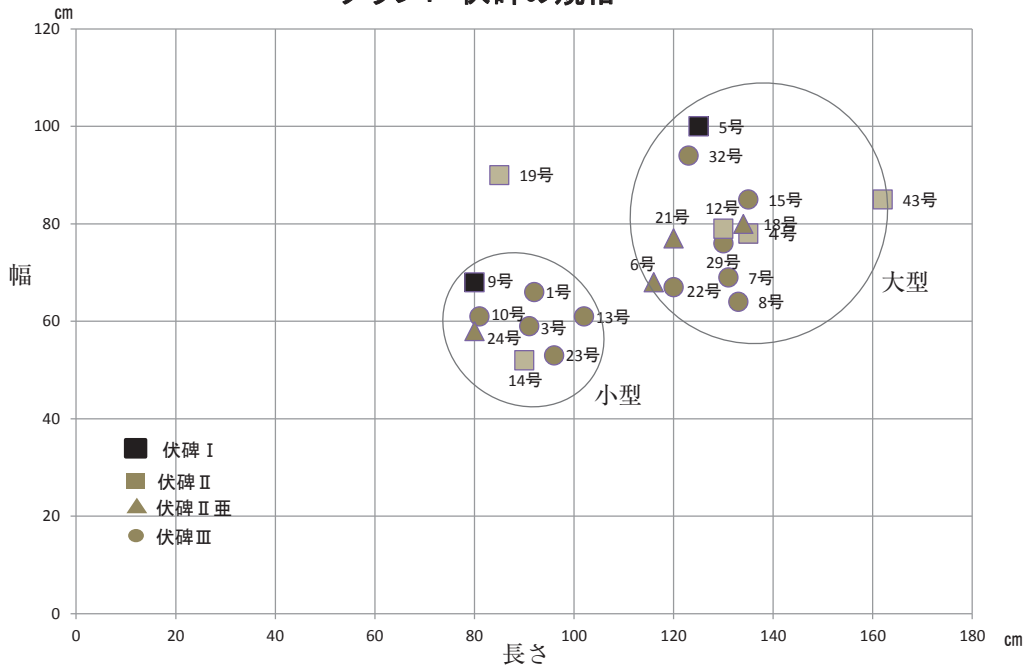
伏碑部分は現在6片に割れているが、本来小判型の一石であったと考えられる。石材は大半の伏碑と同じく混礫凝灰岩である。伏碑の規模は長さ130cm弱、幅85cm、高さ25cmですべて地上に露出している。現状は劣化が進み苔に覆われた状態である。

石組遺構は現状では9個の石材を方形に立てならべたもので、北側面に4石、南側面に3石を縦方向に並べ東西の小口

図7 岡なまこ墓伏碑実測図④(25分の1)



グラフ1 伏碑の規格



に1石ずつ配置しているが、下半は埋没している、石材は伏碑とは異なり溶結凝灰岩と安山岩の方形石材を用い、中には五輪塔の火輪と地輪が横置きに転用して使用されている。その配置は下藤遺跡の石組遺構の神田高士氏による分類のB-3類にあたる(註8)。下藤墓地でも石組遺構の上に伏碑をかぶせた墓碑の一群が見つかっており、同一形式の遺構と判断できることからキリシタン墓であ

ると考えられる。

43号墓(図7、写真図版3)は長さ162cm、幅85cm、高さは17cm以上で下部は埋没している。写真撮影の清掃時に側縁両端の東側で角礫が露出しているのを確認した。縦に置かれた石組遺構の最上部が地上に露出したものと推定される。

②**伏碑**(表3、図4～7、写真図版2～4) 15号墓と43号墓を含めて29基の伏碑を確認した。石材を見ると、27基は、15号墓の伏碑と同じ混礫凝灰岩である。そのため表面が風化して苔に覆われている。5号と9号の2基は中世の石造物と同じ溶結凝灰岩製である。石材の違いを反映して明かに混礫凝灰岩の伏碑と異なる特徴を持つが、配置の同一性から伏碑とする。

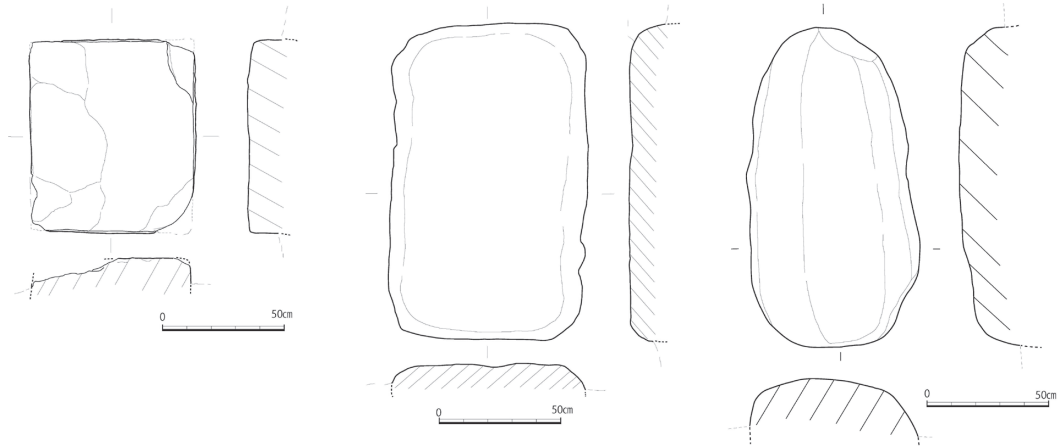
規格 長さと幅をグラフ1にとると、大きく二群に分かれることがわかる。小型と大型である。**小型**は長軸長80～103cm、幅52～68cm、29基のうち1・3・9・10・13・14・23・24号の7基が該当する。**大型**は長さ116～162cm、幅64～100cmで、4・5・6・7・8・12・15・18・21・22・29・32・43号の13基が該当し、43号はとくに大型である。19号も埋没しているために長さが短く計測されているが、大型になると推定される。

平面形態 溶結凝灰岩製の5号と9号の2基は平面形態が正方形に近く、墓碑としてよいか石造物そのものからは立証できないが、ほかの伏碑と同じ配置をなすことから、さしあたり伏碑に含めて記述する。伏碑のほとんどは、その形態属性としてその平面形から四隅に角がない長円形の**A類**(1～3・6～8・10・11・13・15・18・21～24・30号)と隅丸だが長方形の**B類**(4・5・9・12・14・19・32・43号)に大別される。唯一の例外は一方が方形でもう一方が円形の29号で**AB類**とした。規格が小型の伏碑は14号一例をのぞき平面長円形のA類にぞくし(1・3・10・13・14・23・24号)、規格が大型の伏碑はA類に一致する伏碑(6～8・15・18・21・22号7例)とB類に一致する伏碑(4・5・12・19・32・43号6例)があり、その数はほぼ拮抗する。

断面形態 断面が緩い半円形の**1類**と方台形の**2類**にわけられる。平面形態との関係を見ると平面長円形のA類と断面半円形の1類が12例(1～3・7・8・10・11・13・15・22・23・30号)で最も多く、これを**A-1類**とする。次に平面方形B類で断面方台形の2類が7例(4・5・9・12・14・19・43号)で次に多く**B-2類**とする。平面長円形のA類と断面方台形の2類が4例(6・18・21・24号)となり、**A-2類**とする。以上の3群にほぼ分類できる。平面形態と断面形態がほぼ対応することがわかる。さらにB-1類(1例)、AB-1類(1例)、埋没のため形態不明4基になる。

形式設定(図8) 以上の平面形態と断面形態それに石材の違いを加味して伏碑の形式を設定すると以下ようになる。平面長方形断面方台形の溶結凝灰岩を用いる形態B-2類の2例(5・9号)を**伏碑Ⅰ式**、混礫凝灰岩製の平面隅丸長方形で断面方台形のB-2類5例(4・12・14・19・43号)を**伏碑Ⅱ式**、混礫凝灰岩製の平面長円形だが断面方台形のA-2類4例(6・18・21・24号)を**伏碑Ⅱ亜式**、混礫凝灰岩製の平面長円形で断面が半円形のA-1類12例(1～3・7・8・10・11・13・15・22・23・30号)を**伏碑Ⅲ式**、混礫凝灰岩製の断面が半円形のB-1類1例(32号)とAB

図8 伏碑の分類



伏碑Ⅰ式
岡なまこ墓9号墓

伏碑Ⅱ式
岡なまこ墓12号墓

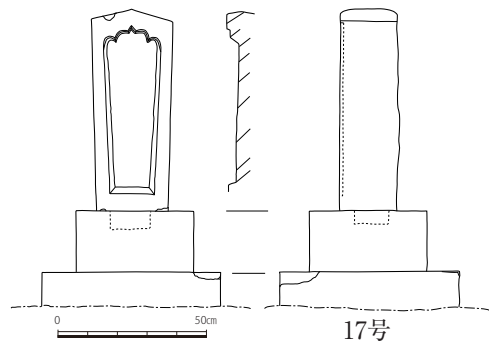
伏碑Ⅲ式
岡なまこ墓7号墓

Ⅰ類1例(29号)の2例を伏碑Ⅲ垂式とする。

この形式設定を単純化すれば、伏碑の上面が平坦なⅠ式・Ⅱ式と、上面が盛り上がるⅢ式となる。Ⅲ式は15号墓で典型に見られるように地上施設としての石組み遺構の上に本来設置すべき形式である。Ⅰ式とⅡ式は43号墓でみとめられたように石組み遺構のうえに置かれたとみられるものも存在するが、Ⅰ式のように地上施設としての方形石造物と考えても差し支えない形態もあり、今後のキリシタン墓の研究の進展によっては伏碑ではなく地上施設に分類される可能性を残している。

註8 神田高士2012「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」『大分県地方史』214 大分県地方史研究会

図9 近世石塔(25分の1)



6 近世近代の石塔ほか(表4、図9、写真図版4)

近世墓1基と近代の石塔2基である。このうち当初の位置から移動していないと考えられるのは17号(図9)の近世墓と44号の近代石塔の表4 岡ナマコ墓近世近代墓一覧

No	形式	型式	石材	墓碑寸法(cm)			銘文等	方位 (北から)	備考
				高さ	幅	奥行			
17	近世墓石	板碑型	溶結凝灰岩	68	27	20	(正面) 幽嶽宗林信士 (右側面) 享和三癸亥天四月十七日 (左側面) 大神朝臣芦刈薩摩守惟清十六代孫 芦刈空右門大神惟森	西へ83度	1803年銘 台石二段 総高100cm
44	近代石塔	-	溶結凝灰岩	60	22	22	(正面) 大神従五位 系図ノ神 惟基 惟衡公 廟宮	東へ90度	台石1段
45上	近代石塔	断面三角形	溶結凝灰岩	52	25	20	(正面) 薩摩之神	-	台石2段

みで、近世の仏教的墓石は17号の板碑形墓石が唯一の例である。その銘から1803年の死者の墓石である。被葬者は成人男性で、墓地の所有者の先祖であると伺った。近代の石塔は44号と45号の上に置かれた碑である。

7 岡ナマコ墓の石造物からの考察

①**大小の規格から** 長さと幅をグラフ1にとると、大きく二群に分かれることを指摘した。小型と大型である、小型は8基、大型は14基をかぞえる。墓碑の大きさが埋葬施設の規格を反映しているとするれば、この規格の違いは単純に考えれば小児と成人の違いと推定できる。

いま仮に夫婦2人が4人の子供を産み、そのうち1人の男児が嫁取りして跡を継ぎ、一人の女兒が成人して婚出し、残る2人が結婚前の亡くなるという多産多死型の社会を想定した場合、すべての死者が同一の墓地に葬られるとすると、理論的には成人と小児の墓は同数となる。岡なまこ墓の場合小型8基大型14基となり大型の成人墓がおおいとみられるが、肉体的には大人並に成人していても結婚前に亡くなれば墓の規格は大型になるケースが出てくる。キリシタン墓が伸展葬の長方形木棺を使用することから考えて、成人した大人が小型の墓に入る逆の例は考えられないから、実際には結婚前の成人が含まれる大型墓が小型墓よりやや多くなると推定される。そう考えると岡なまこ墓の小型8基大型14基という伏碑の規格比は先に想定した多産多死型の単婚小家族の壘代墓地のモデルに妥当な数字となる。岡なまこ墓は結婚後の成人と小児を含む婚出前の死者の埋葬がほぼ同数で、この墓地に葬られた信仰集団は家族集団の全員を共通の墓地に葬ったと推定される。一つの仮説として見解を提出しておく。

次に全員が葬られたと考えられると、墓地の配置はどのような事情が反映されているのだろうか。

②**墓群の配置と構成**(図10) 伏碑は尾根線に対して直交あるいは平行して配置され、墓地の北半中央部には伏碑のない空間があり、そこには中世石塔がおおく分布する。中世石塔のすべては部材が分散しており、中には破壊の痕跡と考えられるものもあり、本来の位置からは移動していると考えられる。伏碑が置かれていった時期にはここから排除されていたものと推定される。実際15号墓では単なる石材として石組構造に転用されている。この墓地に近世の墓碑が建てられる18世紀以後に再び集められたものと考え、現在の中世石塔の分布はかつてのものではなく、墓域の中央には本来埋葬が行われない空間が存在したと推定できる。おそらく、墓地内の通路であり、十字架が設置されていた可能性もある。

長方形あるいはなまこ形の長円形の伏碑の配置が地下の棺の方向を反映しているとするれば、岡なまこ墓では、墓のほとんどは尾根に直交して埋葬され東西方向に埋葬されたことになる。一方尾根線に併行して南北方向に配列される伏碑が墓地の北端(35号)と南端(1~4・6号)で見ることができる。

これらの中にはいずれも2~3基ほどが側面を並行させて配列する墓群(単位列)の存在が見て取れる。南端の1号と2号(A列と呼ぶ)、3・4・5号の3基(B列)、5・7・8・13号の4基

(C列)、9・14号の2基(D列)、10・12・18・19号の4基(E列)、21・22・23・24号の4基(F列)、29・30号の2基(G列)、32・33号の2基(H列)、さらに周囲に11号を含むJ列、35号を含むI列などである。埋没している伏碑を確認できれば個々の伏碑の単位列をさらに見出すことができるであろう。このような配列は、筆者が側方列状配置をよんでキリシタン布教期の墓地の特徴と指摘した事象と同一である^(註9)。一列の数が2基ないし4基までと短く区切られている点や、その単位列が直交する配置を取る点は、岡なまこ墓の個有の特徴であるが、側方列状配置が見いだせる点は、なまこ墓をキリシタン墓地と考える証拠のひとつとなる。

さらに先に小児墓ではないかと考えた小型伏碑について、その位置を見てみると、各単位列の中に点在する場合はA列の1号、B列の3号、C列の13号などで見出せ、その上D列の9号と14号はともに小型である。F列の23号と24号も縦に並ぶ。このような小型伏碑の配列は臼杵市野津下藤墓地や、大阪府高槻市高槻城キリシタン墓地でも同様の配列を見出すことができる^(註9)。キリシタン墓地の特徴を共有していると考えられる。

③墓群の変遷と年代 個別の墓の年代を判定する直接的な手掛かりはないが、墓地の変遷については、墓域の中心部に長方形の伏碑Ⅰ・Ⅱ式が多く配列され、周辺部に長円形の伏碑Ⅲ式が多いと

図10 岡なまこ墓の墓碑配置と空間構成

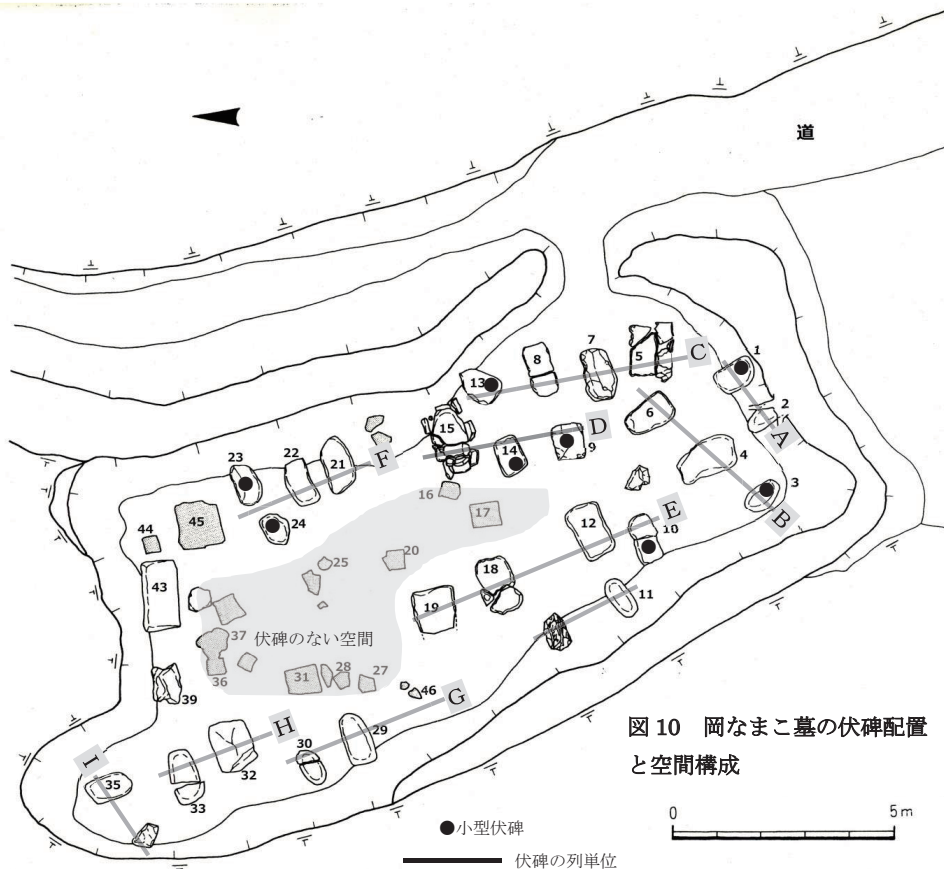


図10 岡なまこ墓の伏碑配置と空間構成

いう伏碑の分布状態から考えて、平面長方形で台形断面のⅠないしⅡ式の伏碑が当初使われ、その後平面小判形断面半円形の「なまこ」形のⅢ式に伏碑は変化したものと推定される。石組遺構を伴う15号墓はⅢ式の時期に構築されたものと推定される。15号墓の年代は石組遺構に転用された五輪塔の火輪が16世紀の新しい型式であるから、それより新しく、下藤墓地で同類の石組遺構が使われる確実な年代である17世紀前葉に併行するものと推定される。伏碑を使用したキリシタン墓地としては、17世紀前葉という年代の前後を含む期間といえるが、その上限と下限を推定するてがかりは今のところなく、今後の課題である。

註9 田中裕介2012「キリシタン墓地の構造」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』

8 まとめ

今回の岡ナマコ墓の石造物実測調査の成果をまとめると次のようになる。

石組遺構の存在 15号墓のように臼杵市野津下藤キリシタン墓地の発見された石組遺構と同一の様式の遺構が存在することを確認できた。中世石塔の部材の転用や配置の方法も含めて酷似する。さらにその上に粗製の長円形の伏碑Ⅲ式が置かれていることから15号墓はこの地域のキリシタン墓の一形式であることは疑いない。

側方列状配置の伏碑配置 伏碑のみの墓群からなり、側面を並行させながら一定の方向に配列する列状配置を単位として墓群構成を看取できる。この点は戦国末期から江戸時代初頭のキリシタン墓地の特徴と共通しており、岡墓地が全体としてある時期キリシタン墓地であったことを示している。

中世石塔群の破壊 キリシタン墓地以前にこの場所には14世紀末にさかのぼる宝篋印塔や16世紀の石塔群が奉献され、この場所が岡集落の宗教的聖地であったことをうかがわせる。その中心となる宝篋印塔に残る隅飾りの欠失を破壊痕と認めてよければ、岡墓地がキリシタン墓地に転換した際に、それまでの石造物を破壊ないし廃棄したと解釈できる。15号墓の石組遺構に五輪塔の部材が転用されていることも破壊の結果であろう。

キリシタン墓地以後 キリシタン墓地が一定期間存続したのちに、そのまま墓地を継続することではなく、1世紀以上経た19世紀初めに近世墓碑が1基のみ営まれる。おそらくキリスト教を棄教後、子孫の墓地は別な場所に移されたものと推定される。さらにここで注意されるのは岡神社の創建年代である。神社明細帳にいう1728(享保13)年という記録が正しければ、岡なまこ墓が形成されていたキリシタンの時代にはこの神社はなかったことになる。キリスト教棄教後、集落の聖地としてはいったん放棄された場所が、享保期に再び神社がまつられるようになり、その後中世の石塔が中央の空間にあつめられて、さらにキリシタン禁制の束縛が緩和された19世紀初頭に子孫が近世墓を建てたものと推定される。

集落の宗教的聖地の変遷 15号墓のようにキリシタン墓の地上標識である石組遺構の石材に、キリスト教改宗以前に建立されていた14～16世紀の仏教石塔群の部材を石材として利用し墓地を構

築している。これは本来村共同体の宗教施設であった仏教施設をそのままキリスト教施設につくりかえたものである。これとよく似た状況は現在隣接地に神社と仏堂があり、宝篋印塔や五輪塔の集積のそばにある臼杵市搔懐キリシタン墓群や、周囲に薬師堂や神社のある一角に存在する市万田磨崖十字架など、戦国期から近世初期の村共同体の宗教的結集の中心となっていた村の神仏空間に、キリスト教の墓碑や記念物が存在する例と共通する現象である。ある時期村全体が改宗したことを示す証左となろう。キリスト教徒に転宗した際に村の仏堂を破却し、同じ場所に十字架を建て、あるいは墓地を設けて村落結合の要とする。この論点は原田昭一氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の指摘であるが、岡なまこ墓もまさに、その指摘のあてはなる例となる。

豊後国の海部郡から大野郡にかけてのキリスト教への改宗は、大友宗麟がカトリックに改宗した1578（天正6）年以後急速にすすむが、臼杵市から豊後大野市はとくに布教が活発であったところである。村落の仏教を中心とする宗教施設を、キリスト教の宗教施設に転換し、そこに墓地が設けられている。岡なまこ墓のような石造物の時代的变化のパターンは、豊後での村落単位での転宗のあり方を示すものである。

本墓地の重要性を認めて調査を勧めて下さった大石一久、今野春樹、神田高士各氏に特に感謝する。なお本報告は、日本学術振興会科学研究費助成金研究活動スタート支援「キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究」（2012～13年度）と基盤研究C「日本近世における外来系墓碑の変容過程に関する実証的研究」（2014～16年度）の成果の一部である。



全景 東から



全景 西から



全景 東北から



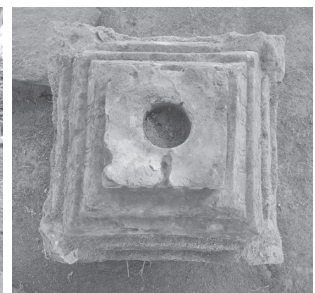
全景 南西から



42号全景



42号笠



42号笠上から

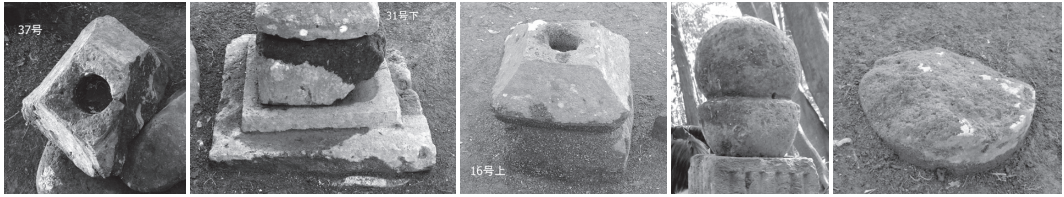


45号全景



45号塔身

写真図版 2



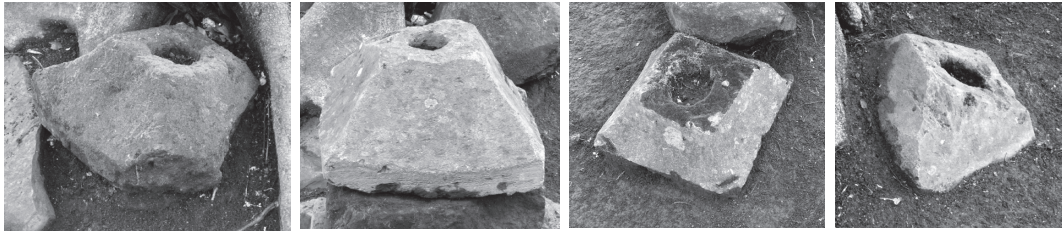
37号

31号下

16号上

42号上

25号

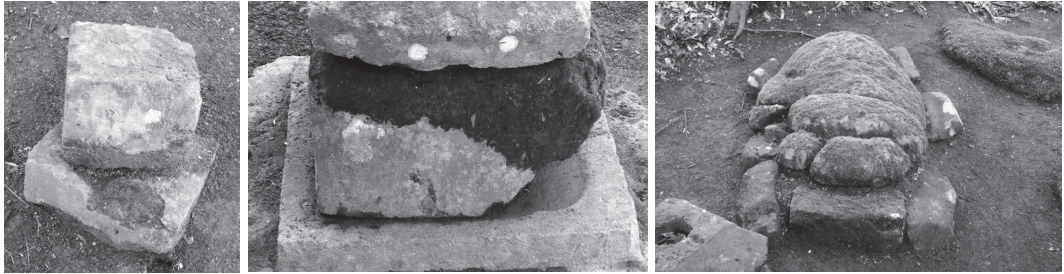


28号

31号上

36号

27号



20号上下

31号中

15号正面



15号背面



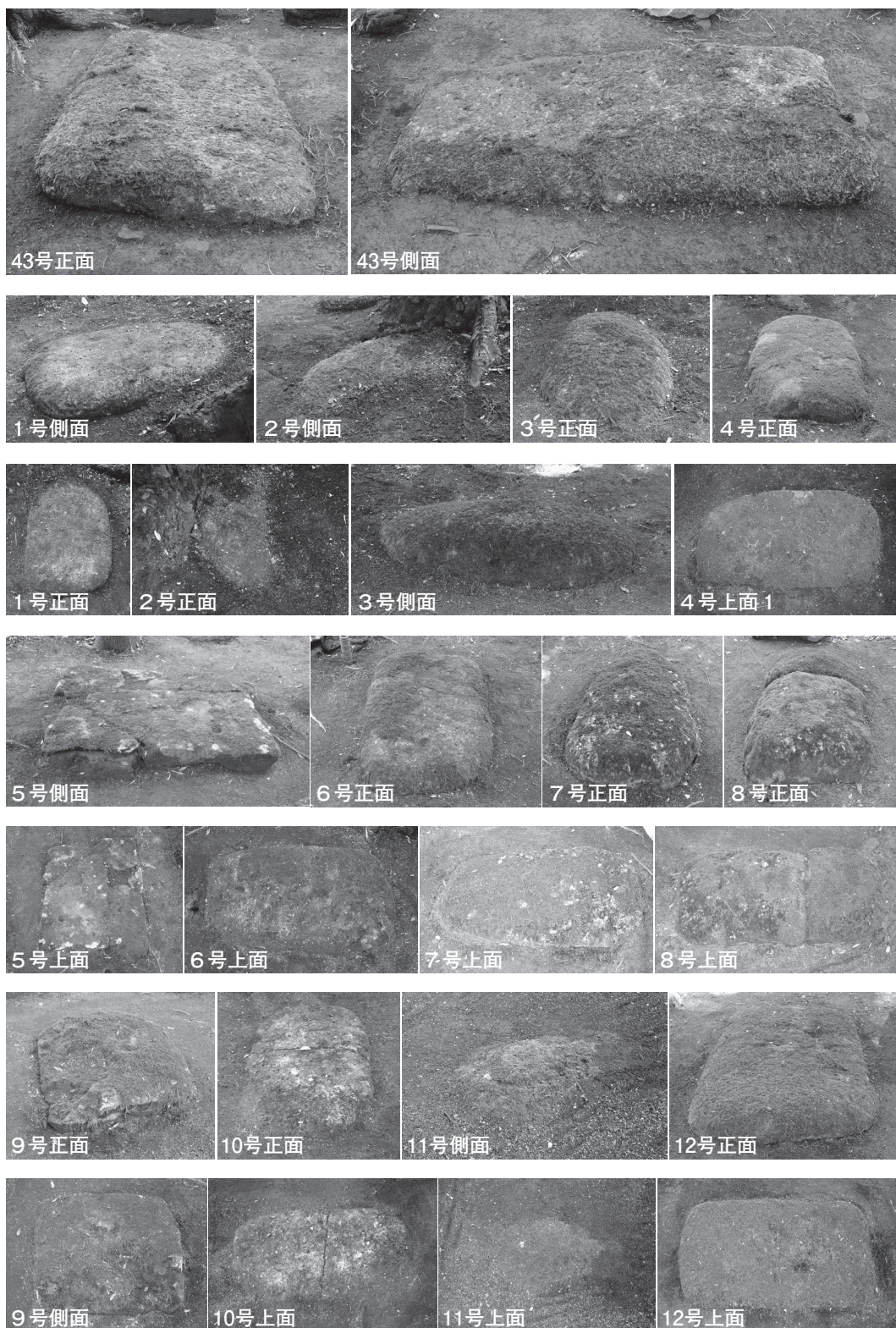
15号右側面



15号左側面



15号上面2



写真図版 4

